

石灰岩の丘に暮らした狩猟採集民

—トルコ、チャクマックテペ遺跡第5次調査(2025年)—

三宅 裕 筑波大学人文社会系教授
板橋 悠 筑波大学人文社会系准教授
石田 温美 日本学術振興会海外特別研究員
シャーヒン・ファトマ チェクロヴァ大学文理学部准教授

Hunter-gatherers Living on the Top of the Limestone Hills: The 2025 Seasons of the Excavations at Çakmaktepe, Turkey

MIYAKE, Yutaka Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
ITAHASHI, Yu Associate Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
ISHIDA, Atsumi Overseas Research Fellow, JSPS
ŞAHİN, Fatma Associate Professor, Faculty of Humanities and Natural Sciences, Çukurova University

三宅
裕
板橋
悠
ほか

1. はじめに

「タシュ・テペレル(石の丘)プロジェクト」と銘打たれた、トルコ南東部シャンルウルフア周辺地域の新石器時代遺跡を対象とした大規模プロジェクトも、早いもので2025年で5シーズン目を迎えることとなった。2024年にはメンディックテペ遺跡で新たに調査が開始されるなど、今後も発掘される遺跡数は増えていくことが見込まれている。ギョベックリ・テペやカラハンテペ遺跡など、プロジェクト開始当初から発掘調査が実施されてきた遺跡でも、大型の人物像や頭蓋骨の埋納址のような発見が相次ぎ、毎年が驚きの連続といった趣である。もちろん、そのような発見ばかりを追いかけているわけではないが、プロジェクトは概ね順調に進行していると評価することができる。2025年11月には5シーズン目の節目を記念する行事が現地シャンルウルフアで催され、トルコ共和国文化観光大臣によって、実際の出土遺物などとともにその成果がメディアに公開された。チャクマックテペ遺跡の発掘調査も、このタシュ・テペレル・プロジェクトの一環として実施されているもので、2025年で5回目を迎えることとなった。

2. 第2の「特別な建物」：15号建物の調査

チャクマックテペは「石の丘」というプロジェクト名の通り、石灰岩の丘陵上に位置する新石器時代初頭の集落遺跡である。これまでの発掘調査において、この集落には長軸が16mを超える大型の建物(10号建

物)が構築されていたことが明らかになり、その建物の周辺からは浮彫りによる装飾こそみられないものの、丁寧に加工された石灰岩製の石柱が多数検出された(三宅ほか 2023, 2024, Şahin et al. 2024)。ほかにも、供献用の皿形石製容器が出土したことなどから、この建物は集団による儀礼祭祀と深く関わる「特別な建物」であったと評価することができる。2024年の調査では、10号建物の北西方にもう1基「特別な建物」とみられる大型の建物が確認され、15号建物と名付けられた。その直径は15mほどあり、一部先行して調査された区域からは、頭骨や角を中心に焼けた動物の骨が多数出土するなど、この建物も儀礼祭祀と深く関係していたことはほぼ間違いないと思われる。この2基の特別な建物の関係はまだよくわかっていないが、ほかの建物との切り合い関係などから、10号建物の方が古く、15号建物が後から建てられた可能性が高いとみられる。この解釈が正しいのであれば、特別な建物は集落から2基検出されているものの、一つの時期に機能していたのは1基だけであったということになる。

2024年には15号建物の南側を中心に調査を進め、基本的に石灰岩の岩盤を掘り窪めて造営されていることが確認されたほか、まだ不明な部分はあるものの、主要な壁のほかにも石列が幾つか検出されるなど、複雑な構造をしていることが明らかになった。また、ほぼ完形の状態で石灰岩製の石製容器、玄武岩製の石皿、供献用と考えられる浅い皿形の石製容器が、焼けたウシの角などとともに床面直上から出土し(三宅ほか



図1 15号建物全景

2025)、床面上からほとんど遺物が出土しなかった10号建物とは対照的ともいえる状況にあることが確認された。

15号建物南側の調査は完了したわけではないが、建物全体の状況を把握するために一旦調査を中断し、2025年には残りの北側部分を中心に作業を進めることとした。15号建物は一部が遺跡の北側斜面にかかっていることもあり、建物の北側は残りがあまりよくないようで、建物の壁自体明確に検出することができなかった(図1)。建物の西側から続いてくる壁は一部確認できたものの、途中で途切れてしまい、全体のプランを明らかにすることはできなかった。今後の調査で、壁の基礎部分が検出される可能性も残されているものの、現状ではすでに失われている可能性の方が高いのではないと思われる。

建物中央寄りの部分では、弧状に並ぶ1段の石列とそれに伴うと思われる、小礫を固めた床面が検出された。この石列は検出された位置やその状況から、建物南側で床面上から検出された石列と対応していると考えられる。また、床面直上から皿形の石製容器が、2つに割れていたもののほぼ完形の状態で出土した。昨年の調査で出土した石製容器と比べると、側面から底面にかけての加工がより丁寧になされていることが観察された。さらに、弧状に巡る石列の北側からは、角の付いたガゼルの頭骨(角の周辺部のみ)が多数検出され、また所々からガゼルとよく似た状態の野生ヒツジの角と頭骨も確認された(図2)。角は2本セットの状態を保っており、そうなるように意図的に頭骨の一部を含めて割り取られたものと考えられる。これらの角と頭骨は焼けている様子が観察され、動物の頭骨を対



図2 15号建物から出土した動物骨

象にした規模の大きな儀礼の痕跡と考えることができる。また、この区域の調査は完了しておらず、動物の角や骨の正確な数については、今後の調査でその全貌を明らかにする必要がある。

3. 遺跡南斜面の調査

遺跡の南側斜面にあたる発掘区(H11区)では、2024年から調査が着手された。この区域には地表面の観察によって多くの石列が露出していることが確認されており、新石器時代初頭の居住域が広がっていることが予想されたからである。実際、発掘調査によって数多くの遺構が検出され、住居跡と思われる建物が密度高く分布していることが判明した。2025年の調査では、H11区での作業を継続させるとともに、その西側と北側に位置するG11区、H10区においても、遺構確認のための調査を開始した。これらの新たな発掘区でも、表土直下から円形半地下式(竪穴状)の遺構が数多く確認され、南側斜面ではある程度の範囲にわたって、建物が密度高く分布する形で居住域が広がっていることが明らかになった。H10区においては、一部33号、34号、35号遺構の調査が始められたが、いずれの遺構も完掘するまでには至らなかった。

25号遺構

発掘区(H11区)の北側から南西に向けてのびる弧状の壁として検出された25号遺構は、半地下式の建物ではなく、壁の外側(東側)の面が揃うことが観察されていた(図3)。大型の石を立てて並べている部分と小型の石を数段積んで壁としている部分があり、基本的には段差を作り出すため、あるいは段差のある部分を補強するための壁であると評価することができる。壁の最下部まで掘り下げたところ、ほぼ岩盤の上に直接構築されていることが判明した。この壁の内側(西



図3 H11区

側の台状部分)の状況は完全には明らかになっていないが、この壁を境として西側と東側とでは、約0.5mの段差が作り出されていたことが確認された。

ここで問題となるのが、この段差、あるいは壁の西側の台状部分がどのように形成されたのかという点である。もちろん、元の自然地形を利用した可能性も考えられるが、もう一つの可能性として、大規模な土木地業によって土を盛り、台状部あるいはテラス状部分が作り出されたことも十分考えられる状況にある。高くなっている台状部には、25号遺構の壁を意識するような形で28号建物が構築され、さらにこの建物が二度改築されながら(27号、20号建物)長期にわたって使用され続けていたことは、盛土の造成と深い関係があることを思わせる。さらに、H11区北側のH10区において検出された35号遺構も、構造的には25号遺構とたいへんよく似ており、両者は一連のものであった可能性が高い。35号遺構西側の台状部分には34号建物が構築されており、この建物も何度か改築され、長期にわたって居住され続けたことがわかっている。

25号遺構と35号遺構によって形成された可能性がある台状部分は、その西側の部分の堆積状況がまだ明確に把握されていないため、仮に盛土がおこなわれたとしたとしても、その規模がどの程度のものであったのか、現状ではよくわからない状況にある。いずれにせよ、2025年の発掘調査で明らかになった状況は、石灰岩の岩盤が露出しているような丘の上において、半地下式の建物を構築するために単に岩盤を掘削するだけではなく、盛土というさらに大規模な地業がおこなわれた可能性を示すものとして注目される。

22号建物

2024年に検出された22号建物は、壁を構成する石列が建物の内側と外側の両方をめぐるという点で、ほかの建物とは異なる特徴を有している(図3)。内側と外側の石の間には土が詰められており、全体としては厚みのある壁となっている。2025年の調査では建物の床面まで掘り下げることができ、床面は石灰岩の岩盤によって形成されていることが明らかになった。床面の中央付近からは、床面である石灰岩の岩盤を掘り込んで作られた、底面が平坦な柱穴が1基確認された。おそらくここに立てられた1本の柱が、建物の上部構造を支えていたと思われる。さらに、この建物の床面からは北側を中心に岩盤を円錐状に掘り窪めた穴(カップ・マーク)が11基検出された。22号建物が検出された際には、特徴的な二重の壁を有していることから、貯蔵用の施設である可能性も想定されていた。しかし、床面に製粉作業などに使用されたと考えられるカップ・マークが多数検出されたことにより、日常の生活が営まれた住居であった可能性が高くなったといえることができる。

25号遺構とともに22号建物の外側を掘り下げていったところ、建物外側の壁も石がほぼ垂直に積み上げられていることが明らかになり、22号建物は岩盤上に構築された地上式の建物であったことが確認された。チャクマックテペ遺跡においてこれまでに確認された建物は、そのほとんどが半地下式の構造であったとみられるが、22号建物のような例外もあることが明らかになり、建物の構造や構築方法にも多様性がみられることが確実となった。

24号建物

H11区の西側で検出された24号建物は、直径が8mを超え、この発掘区で検出された建物の中では最も大きな遺構である。全体のプランとしては円形から楕円形を基調としているといえるものの、建物の南部分は南側に大きく張り出す形になっている(図4)。建物の北側を中心に、一部岩盤を掘り込んで壁と床を作出している部分があるが、南側は床面である岩盤の上に石を積んで壁が構築されている。建物の南西部には長方形に加工された石を並べた仕切り壁が認められ、その内側からは保存状態が良いとは言えないものの、石灰岩の碎石を固めた床面が検出された。床面はかなりの起伏がみられる上に、それ自体が確認できない部分も認められる。この仕切り壁の北西延長線上には建物の壁に接する形で、小型の円形状の施設が検出され



図4 24号建物

た。石が3段積まれており、しっかりとした作りであるといえるが、灰や被熱している様子はいかがわれず、炉と断定することはできない状況にある。

建物北側の壁沿いから、ポータルストーン(出入口用の粹石)と呼ばれるリング状の石が完形の状態で出土した(図5)。石灰岩製のこの石が一般に想定されているように出入口用の粹石であるならば、この建物の入口は北側の屋根の部分にあったことになる。問題は、この石の直径が通常の成人が簡単に出入りできるほど大きくないことで、ポータルストーンと考えてよいかどうか検討が必要であるといわなくてはならない。



図5 24号建物北側から出土した出入口用粹石？

参考文献

- ・三宅裕、板橋悠、シャーヒン・ファトマ 2023「石灰岩の丘に暮らした狩猟採集民—トルコ、チャクマックテベ遺跡第2次調査(2022年)—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』14-17頁 日本西アジア考古学会
- ・三宅裕、板橋悠、シャーヒン・ファトマ 2024「石灰岩の丘に暮らした狩猟採集民—トルコ、チャクマックテベ遺跡第3次調査(2023年)—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』13-17頁 日本西アジア考古学会
- ・三宅裕、板橋悠、石田温美、シャーヒン・ファトマ 2025「石灰岩の丘に暮らした狩猟採集民—トルコ、チャクマックテベ遺跡第4次調査(2024年)—」『第32回西アジア発掘調査報告会報告集』14-17頁 日本西アジア考古学会
- ・Şahin, F. ve Y. Miyake 2025 Çakmaktepe'den avcı-toplayıcı yerleşiklere dair yeni veriler. *Arkeoloji Dergisi* 34, 1-28.
- ・Şahin, F., Miyake, Y., Uludağ, C. ve N. Polat 2024 Çakmaktepe 2022 Yılı Kazı Çalışmaları. 43. *Kazı Sonuçları Toplantısı* Cilt 1, 453-470.
- ・Şahin, F., Miyake, Y., ve C. 2025 Çakmaktepe Kazısı 2023 Yılı Çalışmaları. 44. *Kazı Sonuçları Toplantısı* Cilt 2, 69-92.